

義民の祭祀・顕彰——寛延三義民を事例に

劉 建華

キーワード 義民、「カミ」、祭祀、顕彰

はじめに

近世においては、百姓一揆が頻発、江戸時代を通して3200余件も起こり、それに伴って義民も多く誕生した。郷土を救った人として、義民が「カミ」として祀り上げられる例も多く見られる。ここで、義民を「カミ」という概念で捉える理由としては、近世の神仏混同の時代背景を考慮して、神道の神のみならず、仏教の仏や民間信仰の対象などもあわせて研究対象とするためである。

まず、今までの先行研究をみていくと、義民をめぐる、いくつかの定義がある。例えば、『日本国史大辞典』においては、以下のように定義されている。一般的な語義からすれば、世のため人のために一身を犠牲にしてつくした庶民ということ。歴史用語では、江戸時代から明治初年にかけての、百姓一揆をはじめとする民衆闘争の指導者として働き、その犠牲になった者を指す¹。一方、横山は義民を「江戸時代の百姓一揆の指導者・犠牲者のこと」²定義し、また義民という呼称が一般的になるのは、明治以降のことである³と指摘している。さらに、保坂智は義民を「百姓一揆の指導者」⁴と捉え、百姓一揆の指導者を義民と呼んだ最初の事例は、一八五一（嘉永四）年の「東山桜莊子」（江戸中村座において惣五郎物語を題材として上演された）が大ヒットしたことを記録する「藤岡屋日記」の記述である⁵と論じている。ほかには、『日本国語大辞典』においては、義民は正義のために自分の命をかけて尽くす人民、特に近世、百

1 国史大辞典編集委員会『日本国史大辞典』吉川弘文館、1999：211

2 横山十四郎『義民伝承の研究』三一書房、1985：1

3 同上：34

4 保坂智『近世義民年表』吉川弘文館、2004

5 保坂智「義民誕生の時期と条件」青木美智男、保坂智編集『新視点日本の歴史 5』新人物往来社 1993

姓のために一命をなげうって権力と闘った人をいう⁶と述べている。以上の先行研究からすると、義民は近世の百姓一揆の指導者で、特に犠牲になった者を指す語とする場合が多い。ここからまた、義民としての一種の悲劇性、犠牲性も読み取れる。本稿では義民を「近世の百姓一揆の指導者、特に犠牲になった者」と捉えて論じていく。

義民の中で最も知られているのは佐倉惣五郎（生年不詳～1653）であろう。佐倉惣五郎は下総の佐倉藩の人で、佐倉藩の過酷な年貢に苦しむ農民を救うために直訴を決行して処刑された。その後、惣五郎の事績が物語となり、江戸や大阪の歌舞伎座で上演された。こうして惣五郎は義民のナンバーワンとして全国に知られ、多くの所で供養・顕彰されている。近世には佐倉惣五郎を典型とするように、義民譚が潤色されてその主人公が神格化されるケースが各地に見られる。江戸時代、東北地方においても、天災による不作が頻発していたため、百姓一揆も多発し、義民も多く登場した。保坂智の『近世義民年表』には、総計572例の義民の例が収録されているが、その中には東北地方で発生した例は77例もある⁷。

義民の人神化については、深谷によれば、義民は死んだ人間を神として祀るという神観念（人神信仰）を一つの要素にして成立する。その死が、共同体の存続のための非業の死という性格をもつため、祀られた神は共同体の者にとっては崇る神と観念されることが多い。そのため、義民は明神や地蔵尊などに祀られたことが多く、信仰の性格はおおむね崇る神を祀るものとしての御霊信仰となる⁸。今までの先行研究では、多くの場合、義民を「怨霊系神」「崇り神」として捉えている。しかし、東北地方の77例〔表1〕をみると、怨霊の話が出たのは4例しかなく、その崇りの対象はいずれも代官や肝煎などの権力者や為政者だけである。これらの事例によれば、義民の「怨霊系」論には疑問の余地がある。

6 日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典』第二版、第4巻 小学館、2001：270

7 同4。

8 深谷克己「義民」『日本大百科全書』小学館、1985：675

表 1 東北地方における義民が「カミ（神仏）」に祀られている事例

一揆の名前	神社創建	地蔵の建立・地蔵との合祀	怨霊的要素の有無
陸奥国三戸郡盛岡盛岡領三戸町越訴（青森）	市神社（小祠） （三戸大神宮境内）		
陸奥国気仙郡仙台領今泉・高田村水論（岩）	道慶神社（小祠） 海漁安全、大漁祈願		
陸奥国磐井郡仙台領釘子村越訴	昆野八郎右衛門大明神		
陸奥国和賀郡盛岡領小繋村盗材事件		首切り地蔵	
陸奥国江刺・胆沢・磐井郡等仙台・一関領強訴		首なし地蔵尊 眼病に効能ありと信仰される	
陸奥国閉伊郡盛岡領中里・撰待・中島村一揆		縄しばり地蔵	
陸奥国閉伊郡盛岡領 綿村強訴	農神社（小祠） 義民2人の木像が安置		
陸奥国閉伊郡盛岡領強訴	農神長元地神宮、義民元右衛門像が神体		
陸奥国稗貫郡盛岡領強訴	喜太郎神社		
出羽国雄勝郡秋田領上米村越訴（秋田）	甚助神社 作神様		
出羽国由利郡旗本生駒氏領逃散・越訴	青田神社 田農の神		○
出羽国秋田郡秋田領坊沢村村方騒動		首なし地蔵 五義民地蔵	
出羽国由利郡旗本莊領栗山・水沢村村方騒動		新四郎地蔵	
出羽国雄勝郡秋田領金屋村越訴	田神塔		
出羽国置賜郡幕領米沢預地屋代郷越訴（山形）		地蔵 刑場跡	
出羽国村山郡上山領上山町打ちこわしと牧野村等強訴	五巴神社		○
出羽国置賜郡米沢・最上領番所襲撃		地蔵尊	
出羽国最上郡新庄領本合海村村方騒動	祐左神社		
出羽国田川・鮑海郡鶴岡領越訴	酒井神社 藩主と義民を祀る		
出羽国村山郡領域名不詳蔵増村検見不正		木之進地蔵尊	
陸奥国栗原郡仙台領八樟村村方騒動（宮城）	金田神社（公事の神）、 弥勝神社（刑場跡）		○
陸奥国本吉郡仙台領柳津村村方騒動		四郎延命地蔵尊	
陸奥国耶麻郡蒲生氏領常世村木材無断伐採（福島）		耳剥地蔵	
陸奥国会津郡幕領強訴・越訴		義民六地蔵	
陸奥国磐城郡平領強訴		地蔵尊（刑場跡）	
陸奥国信夫・伊達郡幕領桑折代官所管内強訴		地蔵と合祀	○
陸奥国大沼・耶麻郡等若松民政局内打ちこわし		七地蔵尊	

（保坂智の『近世義民年表』により、筆者作成）

特に、近代になってから、義民に対する顕彰が広汎に行われるようになり、全国各地で義民の顕彰碑が大量に建立されるようになった。「顕彰」とは、『広辞苑』によれば「明らかにあらわれること。功績などを世間に知らせ、表彰すること」⁹、矢野によれば、「傑出した故人の業績を記念し、それを何らかの形で後世に伝えようとする世俗的な性格を帯びる行為」¹⁰という。小松はさらに傑出した業績を残した故人のことを称えるために祀り上げられる神を顕彰系の人神と呼んでいる¹¹。近代における義民顕彰の活発化の時代背景を考えるため、本稿では福島県の伊達市、旧信夫・伊達郡（幕領）に発生した寛延二年一揆と寛延三義民を事例に、義民をめぐる祭祀・顕彰の歴史的な性格の変容や義民が「カミ」として祀りあげられるメカニズムを検討しようと思う。

1. 寛延二年信達一揆と寛延三義民について

1. 1 寛延二年信達一揆の経緯

まずは一揆の経緯について、寛延三義民顕彰会発行（1971）の「義民斎藤彦内顕彰のしおり」より抜粋して示してみたい。寛延二（1749）年信達一揆は彦内騒動、天狗廻状ともいわれる。桑折代官所に新たに赴任した代官神山三郎左衛門が、村々が大凶作にもかかわらず、年貢を増徴しようとしたのに対し、減免や代金納・分割納入などを求めて、68か村の農民が集結し、大一揆を起こした。寛延2年一揆の前には、この信達地方（信夫・伊達両郡）では既に数年続いた不作で農民たちが苦しんでいたが、この年は「田方立毛青立」（田畑の作物がまったく実らない）と記録されたほどの大凶作であった。他の藩では年貢の減免、あるいは施米などを行って農民を救済していたが、領内の百姓たちも再三にわたり、年貢の減免を当時の代官・神山三郎左衛門に願い出たが取り入れられず、返って2分5厘の増税を仰付けられた。困った農民たちはついに立ち上がり、誰が発したかわからないようにした「わらだ廻状」（のちに「天狗

9 新村出『広辞苑 第六版』岩波書店、2008：710

10 矢野敬一『慰霊・追悼・顕彰の近代』吉川弘文館、2006：6

11 小松和彦『神になった人びと』淡交社、2001

廻状」と呼ばれる)を各村々に廻した。その後の密議では、代官所に訴願することを定め、もし聞き入れられない時は強訴やむなしとし、68カ村の総代に長岡村の斎藤彦内、鎌田村猪狩源七、伊達崎村蓬田半左衛門等が選出され、数回にわたって年貢減免の嘆願をおこなったが許されなかった。代官所の無為無策に再度憤怒した百姓総代たちは1万6千8百余人の百姓を率いて大一揆を起こした。神山代官等は大いに驚き恐れ、ひそかに福島・仙台等の諸藩に救援を求めた。仙台藩の虎の威を借りた代官は、68カ村の組頭、百姓代をことごとく取り調べた。多数の者が厳しく取り調べを受けるのを見かねた彦内は自ら出頭して罪を一身に引き受けた。自首した彦内は平秤責めや水牢責めなど厳しく拷問された。彦内の苦しみを少しでも救おうとした源七、半左衛門らも自首した。一揆の結果としては、農民たちが要請した年貢減免や石代納、分納承認などになって結実したが、斎藤彦内、蓬田半左衛門、猪狩源七の三人は翌年4月17日に産ヶ沢でさらし首にされた。

1. 2 寛延三義民とは

この寛延二年一揆の発頭人としての三人の人物について、『寛延三義民顕彰記念誌』¹²や『義民蓬田半左衛門顕彰記念誌』¹³では、三人とも優れてた人物で、日頃から非凡な存在であったと書かれている。斎藤彦内【宝永5（1708）年～寛延3（1750）年】は伊達郡長倉村で、斎藤実盛一族の家柄に生まれ、義侠に富み、学智ある人物であった。享年42歳で、法名剣光常睡信士であり、墓所が福源寺にある。蓬田半左衛門【元禄11（1698）年～寛延3（1750）年】は伊達郡伊達崎村生まれ、温厚篤実で思慮深く、年少の頃には経書を学び又剣技を修めている。中年の頃、衆に推されて百姓代となって、時の名主を補佐して村政に参与し、その職に精励した。享年52歳で、法名夢刀禅山信士であり、墓所が出身地の伊達崎字前屋敷にあり、菩提寺は大林寺である。猪狩源七【享保（1717）2年～寛延3（1750）年】は小野の後裔で県中に武士団をなしていた一族で、

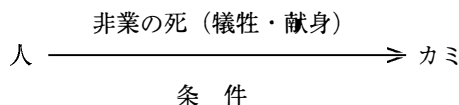
12 寛延三義民記念碑建立会『寛延三義民顕彰記念誌』寛延三義民記念碑建立会、1979

13 蓬田半左衛門顕彰会『義民蓬田半左衛門顕彰記念誌』蓬田半左衛門顕彰会、1999

傑物である。寛延3年鎌秀院墓地に埋葬され、戒名は頓応了悟信士で、享年33歳である。農民の苦渋を救うために、この三人は命をかけて戦い、その後、犠牲になった三人は地元の人々によって祀られ、義民と讃えられ、その事績が代々語り伝えられてきた。

1. 3 義民に列されなかった指導者

寛延二年一揆の指導者をつとめた人としては、彦内らの3人のほかに、宮代村の中村治右衛門や下大笹村の佐々木長三郎などの何人がいた。しかし、彦内らのさらし首の処刑と比べると、その罪科は比較的軽かった。例えば、治右衛門と長三郎は「江戸十里四方陸奥一国を含む重追放、田畑家財闕所」、本内村又右衛門などの3人は「所払い」で、一揆に参加した村の名主は五貫文、頭取は三貫文の過料であったという。これらの人たちは重追放などの罪を受けても命は奪われなかった。そこで、これらの人たちは義民の列に入れられず、「カミ」として祀り上げられていないのは、そのためであると考えられる。すなわち、百姓一揆の指導者が祀り上げられるには、やはり「非業の死（犠牲・献身）」が必須条件なのではないだろうか。そこで、以下のような図式が想定できる。



2. 史料の記録と怨霊の発現

『五穀太平記』と『伊信騒動記』は寛延2年一揆の経緯を記録した最も重要な二つの史料である。『五穀太平記』は近世の著作であり、著者名は不詳である。明治32年(1899)3月の写本(福島市葦沢氏所蔵)は『史料東北諸藩百姓一揆』¹⁴に収録されている。「彦内騒動」という文言が使用され、彦内を中心に寛延二

14 庄司吉之助 『東北諸藩百姓一揆の研究—史料』御茶の水書房、1969

年の一揆を描いている。『伊信騒動記』は桑折代官所手代であった堤三右衛門が著者で、宝暦6年（1756）3月に成立した。福島県立図書館や米沢市立図書館などに収蔵されている。桑折代官所手代としての堤三右衛門の行動を中心にしたもので、寛延2年の一揆は彦内を中心に描き出している。堤は寛延2年一揆の中心人物の一人で、留守の代官に代わって農民に接し、問題の解決に当たっていた。しかし、この二つの史料に記載されている一揆の行動開始と終結の日付が大きく異なっている〔表2、表3〕。こういう大きな差異のため、こ

表2 『伊信騒動記』の記録

期 日	事 件 の 始 末
	寛延2年冷夏、大凶作、神山代官年貢増徴
12. 3（寛延2年）	山王社に集会、密談、天狗廻状を回した。彦内「霊夢」の山王権現のお告げ。
12.11	68か村、16800余名の農民を集結し、代官所を襲い、一揆を起こした。
	福島藩、白石藩、仙台藩に援助を求めた。 堤三右衛門が使者として農民を説得し、農民が退散した。
12.13・14・15	福島藩、白石藩、仙台藩の援兵到着。
12.27	農民への厳しい尋問、禁錮が始まった。
大晦日	彦内が自分が「頭取」であると自首した。 「私一人を罪科に処せばよい、他の農民への波及と取り調べをやめるように」と自首した。
1. 2（寛延3年）	吟味着手、苛酷な調べ、あらゆる拷問
1. 3	天秤責
1. 4	水責。水牢に入れられ、門絶せんとし、代官を罵った。
1. 5	村々の者呼び、責問し、白状が出た。彦内、源七、半左衛門などの指導者が判明した。
2.29	吟味相済、一揆の事情を江戸に報告した。
3.16	仙台藩兵が全員撤退した。
7. 5	堤三右衛門帰国、村々の百姓が村境まで見送る。
7.17	処刑（7.17が7.11の誤りであるという説もあり）
12.20	神山が事件の報告で上京し、彦内の亡霊に苦しんで悶絶した。

（『伊信騒動記』の内容により、筆者作成）

表3 『五穀太平記』の記録

9.17（寛延2年）	山王社に集会、密議、「天狗廻状」を回した。
10. 2	68カ村の1万6千8百余名の農民が集結し、代官所にせまった。
10月2日以後、全く期日の記載はなし、結末としては神山が彦内の亡霊におびえて、自刃した。	

（『五穀太平記』の内容により、筆者作成）

これらの史料の信憑性には疑問が感じられている。

しかし、この二つの史料には三義民が処刑されたことや神山代官が彦内の怨霊で死亡したことが一致している。『五穀太平記』においては代官神山は

「桑折を発駕被成て本宮宿ニ泊り脇本陣を宿とし既に夜之四ツ刻頃寝入らんとし給ふ処御寝所之奥座敷と覚しき上震動して雷之如く何やら怪しく思ひ居る処ニ何となく神山氏胸騒ぎ身震しける所ニ寝ニ雷の落たる如く一同仰天し生たる心地なく然ニ彦内か首生たる如くニして近寄然ニ強氣之三郎左衛門故何程の事あらんと刀を抜き切て放バ更ニ手に不留□初之如く手代用人色々御介抱申上しかバ大息つき惣身大汗を流し如何ニ彦内憎き曲ものと白眼し……毎夜如斯強氣之神山なれ共身体やせ衰ひ狂乱して今ハ本心更に無之漸々千住宿に着きし処……終ニ腹切て相果けり然るニ彦内首生たる如くニてにツこと笑ひて消ニけり誠二人の一念怖しきもの也……」

このように、代官神山は江戸へ行く途中、彦内の亡霊におびえて狂乱してしまい、ついに江戸千住の宿で自刃した。それに対して、『伊信騒動記』においては、出府途中の代官神山が彦内の獄門・産ヶ沢を通りかかった時に

「駕の戸を開らき一目見玉ふに、不思議やむなし荒原、神山の目には獄門にかゝりし彦内の死首忽ち両眼活と見ひらき、神山を礮と白眼ミ駕の中へ飛び込んすいきほひなりけれハ、急き駕の戸を立られけるか、それより例ならぬ気色となり、寝食も安からず……斯のこたく困ミ悩てやう、江戸へ着玉ひしに、着座の日より怨霊の祟り彌増し、日夜に彼首神山の眼に遮りくるしめけるゆへ、医療を尽くし、或は大法・秘法を修しけれとも、終に薬功祈験もなく、悶絶して亡ひ給ふとかや……」

と書いてある。このように、代官神山は江戸に到着後、彦内の亡霊に苦しみ「悶絶」して死亡した。上記のように、代官神山が彦内の怨霊に悩まされて死亡した点は両方の史料に共通している。つまり、この二つの史料には共に怨霊の要素が見られる。それらの著者が世に流布していた怨霊信仰を意識していると考えられるだろう。

「怨霊」とは死後に落ちてくるところのない靈魂である。古来、日本では怨霊

は怨みを残して死んでいったため、個人的な崇りにとどまらず、疫病や天変地異など社会に甚大な被害をもたらされると信じられてきた¹⁵。具体的にいえば、非業の死を遂げ、その後十分な供養がなされなかった靈魂は、死後に自己の宿願を叶えるために、自分を追い落とした人物に崇って出たり、さらには社会全体に災害を発生させると考えられていた。怨靈信仰は御靈信仰とも言われ、「御靈」は「みたま」であり、靈魂を畏敬する表現であり、無実の罪、疫病などで非業の死を遂げた者の靈が崇ると考えられた信仰である。奈良・平安時代においては、流行病の発生や天災なども貴族間の勢力争いに敗れて死んだ者の崇りであると信じられ、それを祀ることが盛んに行われていた。863年（貞観5年）神泉苑では怨靈を鎮めるための御靈会が宮中行事として初めて行われ、上下の御靈神社が設立された。これが御靈信仰の始まりだと思われる。近世になると、佐倉惣五郎をはじめとする義民は代表的な怨靈信仰と見なされて、旧来の怨靈系譜を受け継いだと考えられている。深谷氏によると、近世には義民は百姓一揆の指導者として、農民のために一身を捧げて、悲惨な最期を遂げた。その死が共同体の存続のための非業の死という性格を持つため、祀られた神は共同体の者にとって崇る神と観念されることが多いという¹⁶。

保坂智の『近世義民年表』に記録されている東北地方の77例の中において、怨靈的な要素が含まれる方は4例しかなくて、それにそれらの義民の崇りの対象は代官や肝煎（名主、庄屋）などの為政者に限っている¹⁷。それに対して、中世の菅原道真、平将門や山家清兵衛などは藩主や政敵などの為政者へ崇るだけではなくて、社会全体に天変地異を起こして災いをもたらしている。ここから、近世東北の義民の怨靈は前代の怨靈と異なる性格を呈していることが窺われる。怨靈的要素が含まれている前述の4例の中でも、寛延三義民の例は特に詳細に描かれている。寛延三義民の怨靈への記録は上記の『五穀太平記』と『伊信騒動記』に描かれている彦内をめぐるエピソードしかないが、それに、その崇り

15 山田雄司『怨靈とは何か 菅原道真・平将門・崇徳院』中公新書、2014

16 深谷克己「義民」『日本大百科事典』小学館、1990

17 同4。

の対象は代官の神山などの為政者のみである。そこで、寛延三義民への祭祀が始まったきっかけは義民の怨霊に対する農民たちの畏怖よりは、三義民の犠牲・献身による農民たちの感謝・崇敬の気持ち・思いがその主な原動力だと考えられる。

3. 寛延三義民祭祀・顕彰の諸相

斎藤彦内、蓬田半左衛門、猪狩源七の三人が処刑された後、彼らをめぐって一連の祭祀・顕彰活動が行われてきた。その祭祀・顕彰活動を大きく分けると、祭祀・顕彰施設の建立、祭祀儀礼の執行、三義民の事績を描く史料・伝記などの編纂という三大の枠に分けられる。特に、時代が下るとともに、各時代における三義民の祭祀・顕彰活動は異なる性格を呈していく。

3. 1 近世における寛延三義民への祭祀と信仰

1751年（寛延3）、義民彦内が処刑された後、首はさらされたが、身体の方はやがて斎藤家の菩提寺である福源寺¹⁸（曹洞宗）に葬られた。同年7月11日、農民たちが福源寺住職と協力し、義民の百ヶ日供養の碑を建立した。もともと裏面に三人の業績をたたえた碑文が刻まれていたが神山代官の命令で削られたと言いつたされている。また、同年伊達崎村の人が半左衛門のさらされた首を奪い、仮埋葬をした。翌年、村民によって北前敷に密かに埋蔵された。宝暦年間、伊達崎村の有志らによって「半左衛門太子」というお宮が立てられ、尊崇された。『義民蓬田半左衛門顕彰記念誌』の記録によると、地域民の赤誠溢るる協力を依り、立派な「半左衛門太子」が完成された。祭礼の4月17日には地域の老若男女が参拝し、個々に携行したお酒や甘酒を呑み、馬鈴薯、里芋のお煮しめを酒の肴にして唄を歌い、踊りを踊って終日、半左衛門様の靈魂を慰めたそうだ。それにこの太子は、明治の中期頃までずっと存在していた。ここで

18 福源寺：長倉山福源寺、下志和田ニアリ、曹洞宗羽前國置賜郡米澤町林泉寺末寺ナリ。開山溪岩曹雪寛永年中創建ス。元治二年祝融ノ災ニ罹リ、由緒縁起等灰燼（かいじん）シ。今得テ詳ニスヘカラス。明治十年再建ス。境内佛堂、地藏堂二間。伊達町史編纂室『伊達町史1通史上』伊達町 2001：25



写真1 福源寺の山門
(2016年4月17日 発表者撮影)



写真2 福源寺境内にある義民の供養碑
(2016年4月17日 発表者撮影)

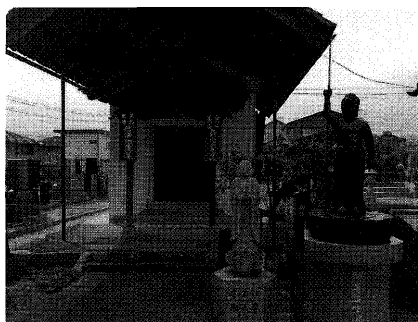


写真3 福源寺境内にある義民彦内霊堂
(2016年4月17日 発表者撮影)



写真4 「義民彦内像」祈禱攸
(2016年4月17日 発表者撮影)

の「半左衛門太子」は一体どういう存在なのかは、はっきり記録されていないが、地域の老若男女が祭事に参加し、酒食や芸能を奉納することから、神式の祭礼に近いと窺われる。従ってここから、「半左衛門様」はお宮の祭神であると推測できる。それに、旧来、この旧信達地方では聖徳太子（太子信仰）を信仰する人々が数多く存在し、近世初期には桑折町では聖徳太子神社も建てられ、ここでの「半左衛門太子」は太子信仰に基づいて作られたとも考えられる。

福源寺境内では、義民斎藤彦内の霊堂があり、その中では彦内が地藏と一緒に合祀され、この霊堂の成立年代は不詳だが、その存在は近世まで遡ることが

でき、義民彦内はずっと地藏¹⁹と一緒に合祀されていると住職（岡本大英氏）が述べている。ここで、義民が地藏と合祀される理由については、「死者供養」の機能を果たした地藏とその「救済の神」としての地藏のダブルイメージが考えられる。詳細に言えば、ここでの地藏は義民彦内を供養する機能もあり、民衆の救い主としての義民を衆生を救済する地藏として表現する側面もあると想像できる。

近世における三義民の祭祀は狭い範囲の地域共同体で行われ、彦内が地藏と合祀されていることや半左衛門が「半左衛門太子」として尊崇されていたことなどから、義民たちが「カミ」としての強い性格が付与されていたことが窺われる。この時期においては、地域共同体の民衆による義民を祭祀し、その霊を慰めるのが特徴である。

3. 2 近代における三義民への祭祀・顕彰の活発化

明治に入ってから、三義民への祭祀・顕彰活動が活発になった。その背景としては、自由民権運動の展開につれて、各地で義民が発掘され、顕彰されるようになった。特に明治10年代後半の高揚期には、多くの自由民権運動家によって、たくさんの義民伝承が収拾、著述され、その顕彰が行われた。自由民権運動家の演出によって、「義民」は「民権家」となり、その行動が真の民権的实践だと評価されてたのである。自由民権運動との結びつきで、世間の義民観も大きく変化した。佐倉惣五郎をはじめとして、多くの義民が称揚された。福沢諭吉（1874）は『学問のすゝめ』²⁰において、義民を「正理を守って身を棄つる」人、

19 地藏尊について：「當邸に鈴木氏何某（なにがし）と云ふ人あり一夜の夢に流薪木の中に地藏尊の像おはしますと夢見たり翌朝に及び甚々不審に思ひ數十百の流薪木を割伐り見るに果して地藏の尊像を得たりとなむ靈驗の事ありて當寺に送り安置し奉るなり」

『福島縣史料集成』に収録されている『信達一統志』。福島縣史料集成刊行會『福島縣史料集成』福島縣史料集成刊行會 1952：516

* 『信達一統志』：著者は鎌田の人志田正徳。農作業に従事するかたわら村々を調査し、信夫郡を天保12年（1841）、伊達郡を嘉永6年（1853）にまとめている。信夫郡は全村が記述されているが、伊達郡は暮子坊荘と小手荘のみ残されている。

20 福沢諭吉『学問のすゝめ』岩波書店、2008：80

「国民の理想的な範型」と捉えた。植木枝盛（1879）は「無天雑録 二」²¹において、義民の事を「一身ヲ擲テ人民之ノ窮苦ヲ救フ、故人ノ所謂捨生取義殺身為仁者」と捉えた。小室信介（1883）は『東洋民権百家伝』²²において、「古ヨリ身ヲ殺シテ仁ヲ為シ生ヲ捨テ義ヲ取ル者」、「幕吏壓虐ノ政ヲ打壞シ、人民倒懸ノ苦ヲ救解」する者として、惣五郎を取り上げ、義民の死を「殺身成仁」と説明した。このように、義民は「捨生取義、殺身成仁」、「国民的な模範」など捉えられ、国民の英雄になってきた。自由民権運動の展開にともない、百姓一揆の指導者・犠牲者が「義民」として大量に発見され、民衆の間では義民への祭祀・顕彰活動も盛んになってきた。

自由民権運動が展開している中で、寛延三義民の祭祀・顕彰活動も近世と違った特徴を現した。三義民を祭祀・顕彰する手段が多様になってきた。1889（明治32）年、寛延三義民没後一五〇年をきっかけに、寛延義民追斎会が成立した。その成立の補助願書（「寛延義民追斎会補助願」）によれば、寛延三義民の義拳を讃える気持ちは明治時代より以前からもあり、福源寺では義民の供養碑の前に香花を供えるなどの行動がすでにあつたという。地元の民衆は自分の先祖を救うために一身を捧げた義民を「英霊」と呼んで、その恩誼に感謝するために、三義民を祀り続けている。

死刑ニ処セラレ候者即チ源七・半左衛門・彦内ノ三名也、右当明治三十二年マテ一百五十年ノ周忌ニ丁リ候、その情実ニ於テハ乍申、畢竟ハ郡内衆民重租ノ艱苦ヲ救済センカ為、一身ノ罪科陥溺ヲモ不顧遂ニ重刑ニ陥リテ、大鈞氏等ノ首唱ニ依リ信達ニ郡ノ費ヲ仰キ、右三名英霊ヲ祭り、碑ヲ當時境内ニ建立シ香花ヲ供ヘ歳時ニ怠ラサル事由来久シ、因テ来ル三月十九日ヲ期シ右寺ニ於テ追斎会執行致度候、就テハ先例モ有之候通り何卒従来ノ恩誼ヲ感荷シ、右追斎会補助仰度奉嘆願候也 [[『桑折町史7』：484]

明治後期になると、三義民を讃える読み物が多く登場し、それにより、三義

21 植木枝盛「無天雑録 二」、『植木枝盛集 第九巻』岩波書店、1991

22 小室信介『東洋民権百家伝』岩波書店、1957：87

民の事跡が次第に多くの人々に知られるようになってきた。まず、1903年（明治36）、地元の福島民報社の新聞編集長久保和三郎が「名譽ノ刑死者（隠レタル義民彦内の伝）」²³という文を福島民報に載せた。冒頭においては、「佐倉ノ義民木内宗吾ノシニアラバヤ、豈 嶋山城下ノ義民 小栗山喜四朗ニアラバヤ、豈 西根郷ノ義人 古河善兵工ニアラバヤ、大仏城外二里、長岡村義民彦内」と書いて、義民斎藤彦内を佐倉惣五郎などの三人と同格の人格者であると述べている。日露戦争の勃発で、久保氏は従軍記者として戦争地に赴し、陣中で朝日新聞社の記者である半井桃水²⁴と戦友になった。その際、時折寛延三義民の事跡を語っているうちに、半井が非常に感動し、戦争が終わったらこれを物語化し朝日新聞に掲載すると約束した。戦後、半井が福島に来て、久保の案内で福源寺、産ヶ沢、宮代山王社等を訪れ、様々な資料を集めて持って帰った。そして、1907年（明治40）、半井桃水は寛延三義民の事跡を物語化して「天狗廻状」（小説）として朝日新聞に連載した。これにより、寛延三義民の物語が全国に知られるようになった。後に、この「天狗廻状」は映画にもなって大いに天下の血を沸かしたという。それにより、1918年（大正7）には彦内の地元長岡を中心とした地域の有志によって、田町薬師堂の境内に寛延三義民記念碑が建立された。その後、1923年（大正12）、当時の福源寺の住職である岡本大憲が「彦内をたたえる歌」を作って、勤務していた長岡小学校（現伊達小学校）の担任学年で毎日のように大きな声で歌っていたという。

- 一、伊達の長岡村民よ 音に聞えし我が祖先
これぞ忘るな彦内ぞ 義の為立ちたる犠牲者よ
- 二、すべて心は泰山の 雲をばしのぐ上に置き
清きけだかきかんばしき 自然の心を友として
- 三、努め努めよ村民よ 義の為ならば彦内と
同じ義侠の心持て 粉骨碎身勉むべし

23 『無方圓』福源寺什物 福源寺所蔵

24 1861～1926、明治大正時代の小説家、本名洸、別号桃水。21年東京朝日新聞社に入社、「啞聾子」（1889）で好評を博し、小説記者として「胡沙吹く風」（1891～92）などを発表。樋口一葉と文学の師である。朝日新聞社 『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社、1994

四、我らの命はこの世のみ 名誉は遠く天地と
立てよ村民一致して 忠孝文武にいそしまん

上記の讃歌の中においては、義民彦内は「祖先」、「義」のために一身を犠牲にした者だと讃えられ、その「義侠の精神」「献身の精神」は村をあげて崇敬すべきだと歌われている。それに、「義民彦内の讃歌」が学校教育の中に使われていることから、近代から義民の教育資源化がすでに始まったと想定できる。その歌詞を通して義民の業績と献身の精神を讃えるとともに、義民の「献身精神」に裏付けられている価値観も生徒たちに伝えられたと想定できる。

また、近代における義民に対する信仰については、「義民斎藤彦内像」という祈祷攷からも窺われる。昭和初期においては、「義民斎藤彦内像」という祈願用のお札が使われ、そこには札の左側に「抜苦与楽祈祷攷」、右側に「衆生無辺誓願度」、真ん中には義民斎藤彦内の像が描かれていた。ここには、義民彦内が「カミ」として崇められていた形跡も窺われる。また、「苦を抜いて楽を与える」という内容はまさしく義民堂に祀られている地蔵の「厄除け」などのご利益に通じると思われる。そこから、義民彦内が寛延二年一揆を指導し、農民を苦境から救い出したことも連想させられる。義民彦内が民衆を救済することが地蔵の「救済の神」としての役割が共通していると考えられる。そのため、ここで、義民信仰と地蔵信仰の結びつきが読み取れる。現在の義民彦内霊堂においても、中心には地蔵が安置され、隣には義民彦内の位牌が置かれている。地蔵には厄除、安産などのご利益がある。

近代において、自由民権運動との結びつきや義民観の変容により、義民の祭祀・顕彰活動が活発になったことは大きな変化として考えなければならない。寛延三義民の祭祀・顕彰活動も近世と異なる形態を呈している。近代には、義民事件の物語化、記念碑の建立や義民讃歌の創出など、義民祭祀・顕彰の手段が多様になってきた。これらの顕彰活動によって義民の話やその業績がより広く知られるようになった。また、寛延三義民百五十回忌をきっかけに、「寛延義民追斎会」も成立し、近代になっても地域民衆の三義民への感謝・崇敬の思

いが読み取れる。また、小学校の生徒に義民の讃歌を歌わせることから地域における義民の教育資源化も窺われる。特に、昭和初期に登場した「義民彦内像」の祈祷伎から近代における民衆の義民への信仰、義民の「カミ」としての靈驗への信仰が明らかに見られる。

3. 3 戦後における三義民の祭祀・顕彰

3. 3. 1 義民彦内墓石の再建と顕彰会の成立

1970年（昭和45）3月、福源寺の住職岡本大憲が彦内墓石の傾きが甚だしいと痛感し、再建を斎藤家に相談した。同年5月10日、斎藤家の子孫が墓地に参集し、整備作業が開始した。墓石整備の事は福源寺檀家総代・世話人の耳に入り、「彦内様は斎藤家親族だけのものに非らず、此れは檀家において力を出すとの事」と、斎藤家親族一同初め、檀家一円となり、墓石再建を目指した。その後、当時の伊達町長吉田秋一氏もこれを知り、「彦内様は斎藤家又は檀家一円のものに非らず、我が伊達町は無論の事、信達二郡に呼びかけて協力を求むべき」と乗り出した²⁵。義民彦内の墓石整備事業をきっかけに斎藤彦内顕彰会が産声をあげ発起人会を結成した。その後、顕彰会役員は町内募金と他市町村募金に奔走した。1971年（昭和46）、4月17日彦内の処刑の日に落慶式並び大法要が執行された。このように、三義民顕彰会が結成し、顕彰会を担い手とした「三義民供養祭」も定着し、毎年行われるようになってきた。

3. 3. 2 寛延三義民顕彰碑の建立

上記の義民彦内墓碑再建の募金勧誘の件で、斎藤永吉（斎藤家子孫）が他の顕彰会メンバーと一同桑折町産ヶ沢の佐藤貞治氏の家に伺った時に、当家の主人から以下のように語られた。「明治末期か大正初期か不明なれど桑折町の大豪農である角田林兵衛氏のお婆さんある晩の事産ヶ沢に於いて処刑されし彦内の夢、枕邊に立ちし事なり。其のお婆さん直ちに産ヶ沢に墓標を立て常に自ら

25 「郷土の昔今」刊行委員会 『郷土の昔今』「郷土の昔今」刊行委員会 1985：116

お参りを致せし由その後お婆さん他界され又其の墓標も朽ち果て現在は只一株の桑の木だけが目印となり、私（地主）は其の桑の木だけは大事に保存している」²⁶これを聞いた斎藤永吉氏は痛く骨身に応え、その後の福源寺世話会で産ヶ沢に記念碑の建設案を提議した。これをきっかけに、1979年（昭和54）の寛延三義民二百三十年忌を以って三義民の顕彰碑が処刑の地である産ヶ沢に建設されるようになった。

3. 3. 3 新たな「義民讃歌」の創出

昭和50年代には、元住職の岡本錦城氏の要請で、佐藤東順（地元のある会社の社長、伊達市民謡会会員）が「義民彦内讃歌」（正式な名前「大津絵義民讃歌」）を創作した。それ以来、この讃歌が三義民の供養祭に毎回歌われるようになってきた。佐藤氏の話によると、当時寛延二年一揆や寛延三義民などに関する様々な歴史資料を調べた上で讃歌を作ったという。佐藤は伊達市民謡会会員でもあり、三義民の供養祭ではいつも三人の弟子と一緒に自ら讃歌を奉詠している。

寛延二年の秋深き 数年続きの凶作に 暴虐非道の代官は
剛愎年貢で私利私慾 凄愴悲惨の農民は 飢えと寒さの生地獄
天狗廻状立ち挙がる 戦々免租を嗷訴して 潔く関る詮議に自首出て
民を救いて世を正し 産ヶ沢玉散る義民ぞや

上記の佐藤氏が作った「義民彦内の讃歌」は大正時代に当時の福源寺住職の岡本大憲の「義民彦内をたたえる歌」と比べると、「三義民」を主人公にその「義挙」を称揚するとともに、寛延二年一揆事件の全体像をも簡潔に描き出した。

さらに、平成になってから、義民半左衛門と義民源七をめぐる一連の顕彰事業も行われた。まず、1999年（平成11）、三義民250年忌の節目に、「蓬田半左衛門顕彰会」が結成され、義民の霊に報い、その遺徳を顕彰するために、墓所の整備や法要の執行など一連の事業が行われた。翌年には、義民源七の菩提寺

26 同12：118

鎌秀院で墓石整備が行われ、案内板が安置された。

3. 4 三義民祭祀の実態：寛延三義民供養祭（第267回・268回を事例に）

筆者は2016年4月17日に行われた第267回と2017年4月17日（三義民の命日だと考えられている）に行われた第268回寛延三義民供養祭で参与観察を行った。ここでその具体的な流れや参加者の構成を紹介する。

寛延三義民顕彰会が結成されてから、「寛延三義民供養祭」は定着し、福源寺を中心に毎年行われるようになってきた。その流れとしては、午前11時、まずは三義民の処刑地である産ヶ沢にある寛延三義民顕彰碑の前で読経、献膳や進前焼香などが行われる。次に寛延三義民記念碑の前で同じく読経や進前焼香などが行われ、最後に福源寺境内において一連の行事が行われた。福源寺の本堂においては、まず福源寺梅花講により「花供養御和讃」が奉詠され、次に顕彰会会長が挨拶し、そして導師（福源寺住職）による拈香法語、参列者の進前焼香、回向が行われ、最後は「大津絵義民讃歌」が奉納された。その後、本堂の裏側にある義民斎藤彦内の墓前においては、読経や焼香などが執行された。すべての供養行事が行われた後、福源寺においては参加者の茶会が行われた。

現在の三義民供養祭に来る参列者は毎年60名ぐらいで、ほとんどは寛延三義民顕彰会の会員であり、わずか10人ほどが無所属の人たちである。参列に来る顕彰会会員の中には、伊達町郷土史研究会会員、福源寺関係者（宗教者の他に、役員、婦人会会員、梅花講講員）、斎藤家子孫（10代目と11代目の母娘）等が含まれている。それに、数年前から、伊達テレビからもいつも2人で取材に来るようになってきている。地元のテレビ局として三義民の事跡をより多くの人々に知らせ、それを後世まで伝えていくために、寛延三義民供養祭の様子を録画して10分ぐらいの長さの映像として放送している。

現代の義民祭祀・顕彰については、福源寺、遺族及び町側がいずれも大きな役割を果たしている。それぞれの努力や協力で墓石の整備や顕彰会の結成が順調におこなわれた。特に、当時の伊達町長吉田氏の呼びかけの影響は大きく、ここから、町行政側の支持的な態度が窺われる。「彦内様は斎藤家又は檀家一



写真5 寛延三義民記念碑の前の供養行事
(2016年4月17日 発表者撮影)



写真6 寛延三義民記念碑前の法要、焼香
(2016年4月17日 発表者撮影)

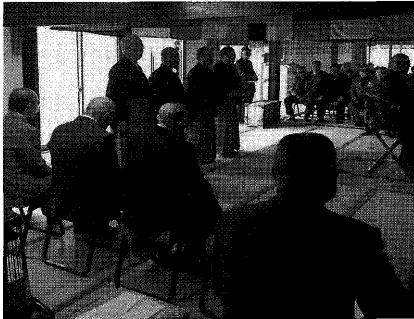


写真7 本堂における行事—義民讃歌の献上
(2017年4月17日 発表者撮影)



写真8 彦内墓前における法要、進前焼香
(2017年4月17日 発表者撮影)

円のものに非らず、我が伊達町は無論の事」という町長の発言からは、郷土の英雄や地域のシンボルとしての義民の存在が読み取れる。それに、この時期には墓石の整備、顕彰会の結成及び供養行事の恒例化が大きな特徴である。寛延三義民顕彰会の結成により、その祭祀・顕彰活動が恒例化にされた。近年、地元テレビ局が三義民供養祭を報道していることから、マスメディアが義民の顕彰活動に取り組んで、義民たちの功績をより多くの人々に知らせ、その業績を後世まで伝えていこうとする努力とみることができる。

おわりに

以上、寛延三義民を事例に、義民が「カミ」に祀りあげられるメカニズムと時代ごとに義民たちをめぐる祭祀・顕彰活動の様相に検討を加えてきた。時代の変化にともない、義民の祭祀・顕彰活動も異なる歴史的な性格を呈している。

まず、義民が「カミ」に祀りあげられるメカニズムについては、旧来の「怨霊・祟り論」に疑問を抱きながら、保坂智の『近世義民年表』に記載されている東北地方の77個の義民の事例を考察した。東北地方の事例からみると、近世においては、義民に関する記録の中には怨霊的な要素が描かれているが、その祟りの対象は代官などの為政者だけである。中世の菅原道真の怨霊のように、社会全体に天変地異を起こすのは見られない。そのため、農民たちによる義民に対する祭祀が始まったきっかけは義民の怨霊とは考えにくい。それに対して、村全体の農民を救うために一身を捧げた義民たちの「死」には犠牲性・献身性があるので、その「犠牲・献身」に基づく農民の感謝・崇敬の感情・思いがその祭祀の動機と考えられる。義民たちの「捨生取義、殺身成仁」という崇高な人格への尊崇がその祭祀・顕彰活動の契機やその祭祀・顕彰活動が維持されてきた動機だと想定できる。

寛延三義民の場合では、彦内怨霊の「祟り」の対象が代官などの権力者に限っていることから、寛延三義民が「カミ」に祀りあげられる理由としては、彦内の「怨霊」への畏怖とは言えない。しかし、三義民が「カミ」として祀り上げられる条件としてはやはり「非業の死」が必要である。ここでの「非業の死」には「犠牲性・献身性」がある。そのため、その「非業の死」による怨霊の祟りへの恐怖ではなく、その犠牲・献身の覚悟や精神を持っている義民たちの崇高な人格に対する農民たちの感謝、崇敬の感情・思いがその祀りの契機や後世まで維持されている原動力であると考えられる。

次に、各時代におけるその祭祀・顕彰の様相をまとめてみると、近世には、義民彦内が地蔵と合祀されていることや義民半左衛門が「半左衛門太子」としてお宮が建てられ、祭神として祀られていることから、義民たちの霊を慰める側面もあるものの、義民を「カミ」として祀り上げ、信仰していた面も窺われ

る。また、近代になって、全国にわたる自由民権運動の影響で、義民に対する祭祀・顕彰活動が大きく変化した。自由民権家たちにより、多くの義民伝承が著述され、義民は「正義のために身を捨てる者」、「国民的な模範」と捉えられた。近世と比べると、顕彰の要素が増殖したことが見られる。この時期における寛延三義民の祭祀・顕彰活動は盛大で多様になった。三義民の業績をより多くの人に知られるために工夫が行われた。寛延二年一揆事件の物語化、記念碑の建立や義民讃歌の創出など、様々な形で義民への記憶やその功績への伝承が行われた。さらに、現代に入ると、義民の祭祀・顕彰活動が盛大化、組織化、恒例化する傾向が見られる。特に、顕彰会の結成により、その祭祀・顕彰活動が恒例化し、三義民の供養祭が毎年行われるようになった。寺院、地域自治体や地域のマスメディアなど各方の力によって、三義民の祭祀・顕彰活動が定着し、三義民の功績が様々な形で伝承されている。この時期において、地域の人々にとって三義民は神仏より郷土の英雄、地域のシンボルとしての精神的な支柱となったとも言える。

最後、寛延三義民の祭祀・顕彰の歴史を遡ってみると、「犠牲・献身」による民衆の感謝の思いがその「カミ」として祀られている原動力だと考えられる。また、時代の変化に伴い、その祭祀・顕彰は異なる様相を呈している。特に、近代の自由民権運動の影響で、顕彰の要素が一層強くなり、義民の事績をより多くの人々に知らせるために、様々な工夫や努力が行われた。それに、近・現代における三義民への祭祀・顕彰の中で、宗教的な供養行事を通してその冥福を祈り、感謝の念を表すと同時に、学校教育や地域民衆の日常生活の中（地元テレビ局の放送など）で、義民の事績を利用して、その「献身精神」に裏付けられている価値観を人々に伝える新しい傾向も見られる。これらの新しい形式における義民の事績伝承が、地域の人々にどのような影響を与えたのかについても、今後の研究では注目していきたい。

参考（引用）文献

- 朝日新聞社 『朝日日本歴史人物事典』 朝日新聞社、1994
- 植木枝盛 「無天雜録 二」、『植木枝盛集 第九卷』 岩波書店、1991
- 寛延三義民記念碑建立会 『寛延三義民顕彰記念誌』 寛延三義民記念碑建立会、1979
- 「郷土の昔今」刊行委員会『郷土の昔今』「郷土の昔今」刊行委員会 1985
- 国史大辞典編集委員会『日本国史大辞典』 吉川弘文館、1999
- 小松和彦『神になった人びと』 淡交社、2001
- 小室信介『東洋民権百家伝』 岩波書店、1957
- 庄司吉之助『東北諸藩百姓一揆の研究—史料』 御茶の水書房、1969
- 福沢諭吉『学問のすゝめ』 岩波書店、2008
- 伊達町史編纂室『伊達町史 1 通史上』 伊達町 2001
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 『日本国語大辞典』 第二版、第 4 卷 小学館、2001
- 福島縣史料集成刊行會『福島縣史料集成』 福島縣史料集成刊行會 1952
- 横山十四郎『義民伝承の研究』 三一書房、1985
- 保坂智「義民誕生の時期と条件」青木美智男、保坂智編集『新視点日本の歴史 5』 新人物往来社 1993
- 保坂智『近世義民年表』 吉川弘文館、2004
- 矢野敬一『慰霊・追悼・顕彰の近代』 吉川弘文館、2006
- 蓬田半左衛門顕彰会『義民蓬田半左衛門顕彰記念誌』 蓬田半左衛門顕彰会、1999
- 桑折町史編纂委員会『桑折町史 7』 桑折町史出版委員会 1991

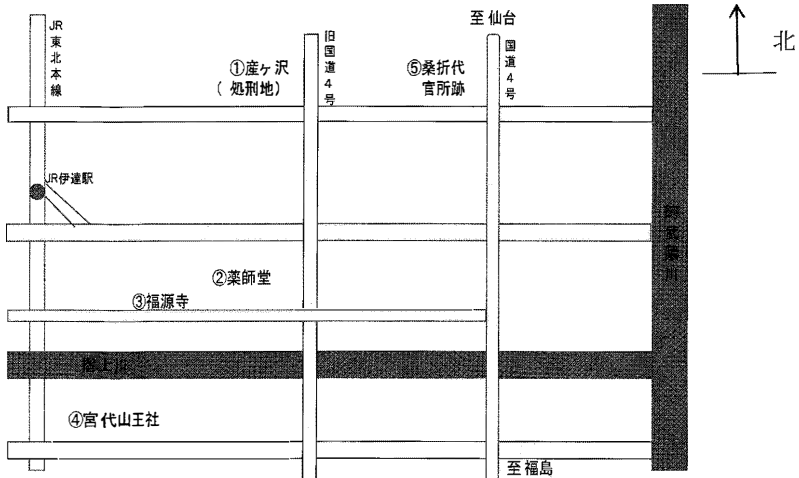


図1 関連施設位置略図 (義民斎藤彦内墓所案内を参照)

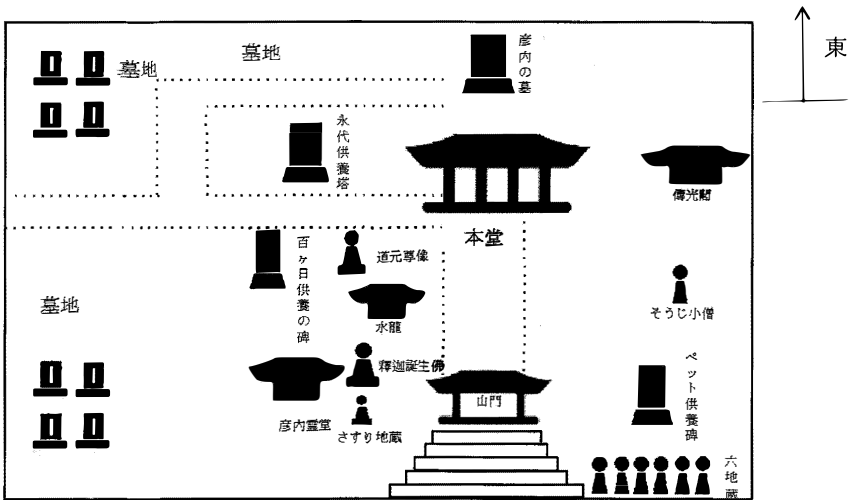


図2 福源寺境内略図

A study about the Deification and Honoring of Gimin: on the case of Kanen Gimin in the Shindatsu ikki

Jianhua LIU

In the Edo period of Japan, a series of disasters including drought, flooding and insect pest, the bad harvest and famine were occurring frequently. As a result, to demand reduction in rice levy, the peasant revolts (hyakusho ikki) broke out frequently yet. During the peasant revolts, the leaders of the peasants, who led riots on farmer's side, especially those leaders who were arrested and beheaded, are called "Gimin". To save the peasants from the sufferings, a lot of Gimin sacrificed their lives. After their death, many "shrines" and "Jizo" were built for the Gimin. Then, the Gimin were revered and enshrined as "Kami".

In the earlier studies, given to their unnatural death, the deification and reverence of Gimin is explained to the feelings of awe towards their "Onryo". However, by analyzing the cases (seventy seven) of the deification of the Gimin in Tohoku region, I found that the stories of "Onryo" appeared only in four examples and the targets of the Onryo's curse(Tatari) were limited to the person in authority such as the daikan of Bakufu. Then, I have some doubts about the explanation about motives of the Gimin's deification to their "Onryo". Besides, according to the influence of the Jiyu Minken Undo(Movement for Liberty and People's Rights)in Meiji era, lots of Gimin were discovered and honored, the factors of honoring became noticeable.

Considering the above-mentioned circumstances, in this paper, I would like to review the mechanism and the historical characters of the deification and honoring of Gimin through the example of Kanen Gimin in the Shindatsu ikki.